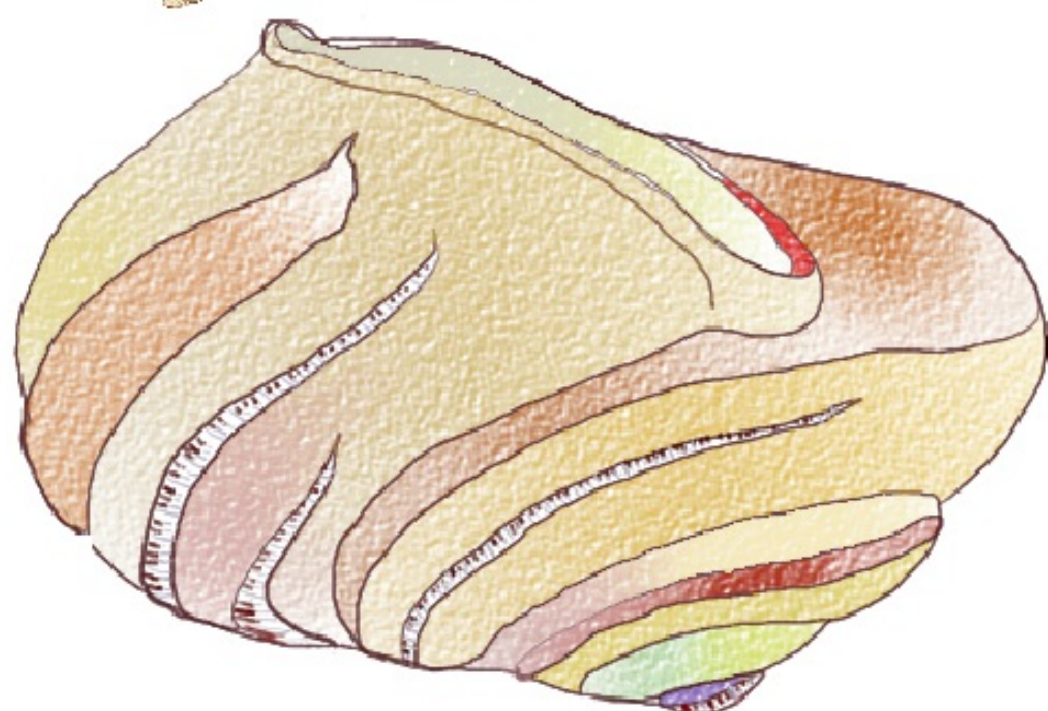
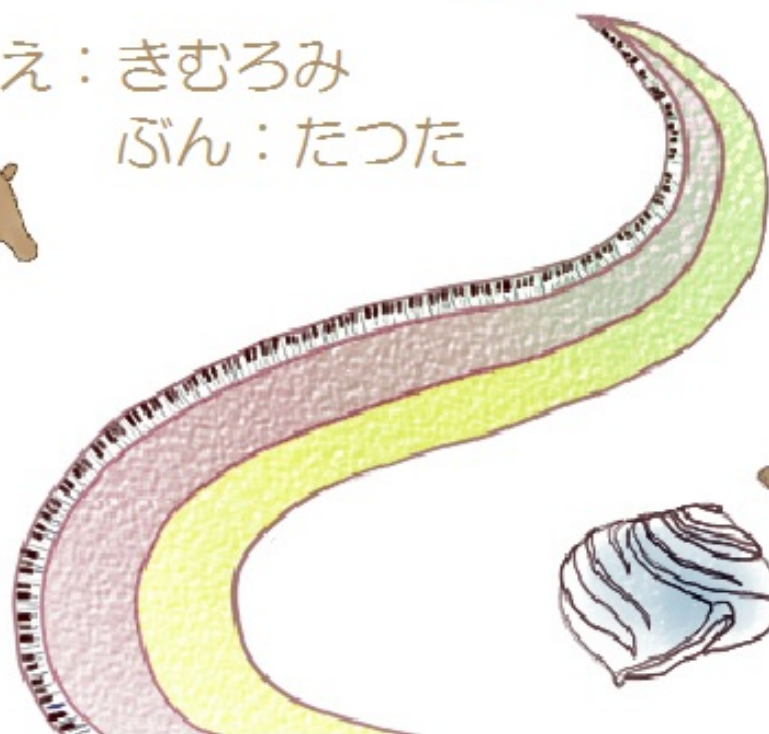


ばくと かたつむり
の
まいご
の
夜



え：きむろみ
ぶん：たつた



おおきいばくとちいさいかたつむり

ある夜の ことです。

ばく と かたつむりは けんかを しました。



かたつむりが とつぜん 殻に とじこもり、 ばくが はなしかけても、 ちっとも こたえなくなって しまったのです。

「ねえ かたつむり、 どうしたの？」

かたつむりが きゅうに だまりこんだので、 ばくは せなかから かたつむりをおろしました。

「かたつむり、 こっちみてよ」

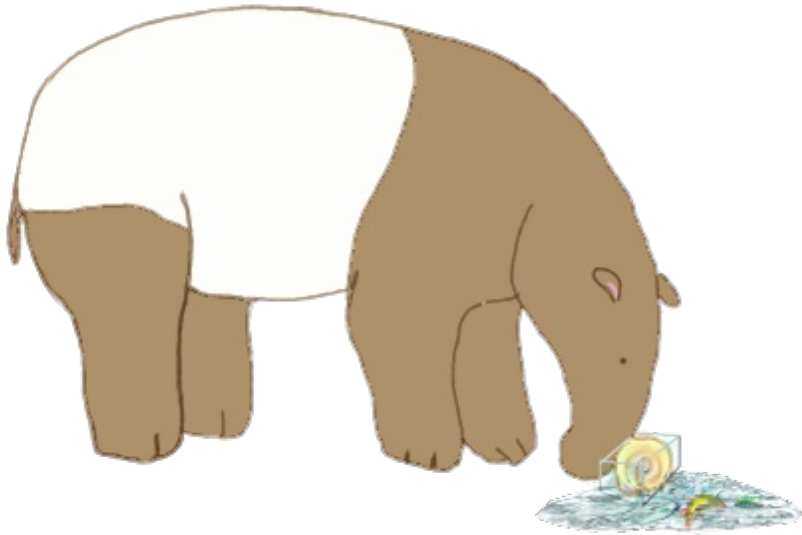
ばくは、 ちいさな まるい 殻に むかって にらめっこ を してみました。

でも、 ばくが、 おもいついた へんなかおを ぜんぶ してみても、 かたつむりは ちっとも でてき ません。

だれも みない にらめっこ の つまらないこと といったら！

「かたつむり ったら、 ふんじゃうよ！」

ばくは、 ぶんすかして かたつむりを にらみましたが、 それでも かたつむりは ぴくりとも うご きませんでした。



このように、かたつむりはときどき 殻に ひきこもってしまうことがありました。

そうすると、ばくは、しんぱいなのと、どうしたらいいのかわからないのとで、しだいに とげとげしたきもちで いっぱいになってしまうのです。



「かたつむりなんて、もう知らない！」

ついに、ばくは キャベツばたけの中に かたつむりを おきざりにして、ひとりであるきだしました。

キャベツが みどりなのにも、星が きらきら ひかっているのにも、いらいらしました。

かたつむりが 殻に ひきこもらなければ いいのに。

ばくは、足がいたくなるまで ずんずん すすんでいきましたが、ついに たちどまりました。

まだ おこっていましたが、どうじに だんだん さみしくも なっていました。

かたつむりが ばくに いつも へんじを してくれればいいのに。

かたつむりが ばくのことを すきだったら いいのに。

もしも このまま、ばくが どこかに いってしまって、かたつむりのもとに もどらなかったら、かたつむりは どうするでしょうか。

ばくは、じぶんに きいてみました。

目をとじて、とげとげしたきもちに 耳をすましました。



殻から出て、ばくが いないことに 気がついたら、かたつむりは あわてるでしょうか。

いっしょうけんめい ばくを よぶでしょうか。

よばないかもしれません。

ばくを さがすでしょうか。

もしかしたら さがさないかもしれません。

そして、キャベツばたけの中を ひとりであるきだすのかもしれません。



でも、かたつむりは きっと泣くだろうと ばくは 思いました。

だって かたつむりは、なきむしですから。

そうしたら、なみだで みちしるべとなる 星が 見えなくなって まいご になってしまうか もしれません。

そのうち たいようが のぼってしまったら、泣きながら のろのろあるいている かたつむりは、はらぺこの鳥に ねらわれてしまうか もしれません。 とおりがかりの だれかに ふみつぶされてしまうか もしれません。

うわあ！

ばくの しんぞうは きゅっと いたくなりました。まるで とげとげしたきもちが ばくには ねかえってきたようでした。

そうならしてしまったら、ばくは 二度と かたつむりに あえません。



ばくは、かおを あげて あたりを みまわしました。

どこを むいても、おなじような キャベツが みわたすかぎり ならんでいます。

このどこかに、かたつむりが ひとりで いるのです。

でも どこに？

ばくは、まいごに なってしまっていました。

ぷんすかしながら歩いていたせいで、どこからきたのかさっぱりわかりません。

ばくは、とりあえずつまさきだちになりました。

まんがいち、かたつむりをふんでしまったら、たいへんです。

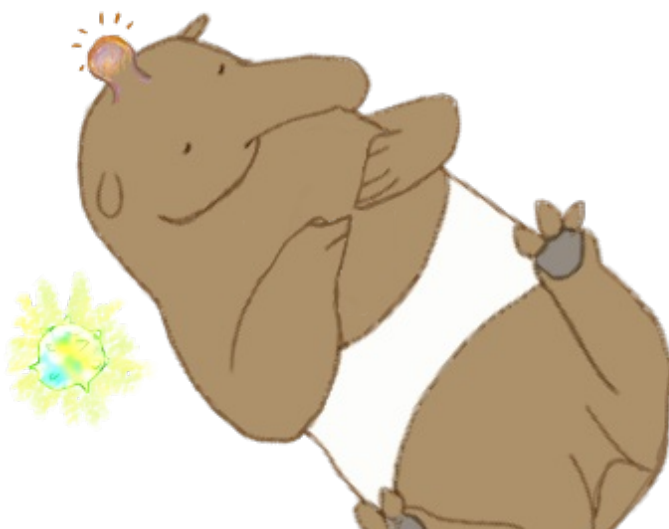
そうして、ばくが、そろそろと、でもできるだけはやくかたつむりを見つけようと、一歩ふみだしたちょうどそのとき。

ひゅるひゅると 流れ星が おちてきました。



ごつん！

あたまにかたいものがぶつかって、ばくの目の前はまっくらになりました。





ある夜の ことです。

気がつく と、ばくは きれいな ほらあな の 中に いました。



あかりは ありませんでしたが、ちっとも くらくありません。

まわりの かべが きらきらと かがやき、あたりを やわらかく てらしていました。

いりぐちは まんまるで、中は ひろびろと しています。

かべに みちしるべのように ちゃいろの線が いっぱん 奥まで つづいていました。

ばくは、つるつるした 床を しっかり ふみしめて 首をのばして みましたが、みちが まがっているので 中になにがあるのかは みえません。

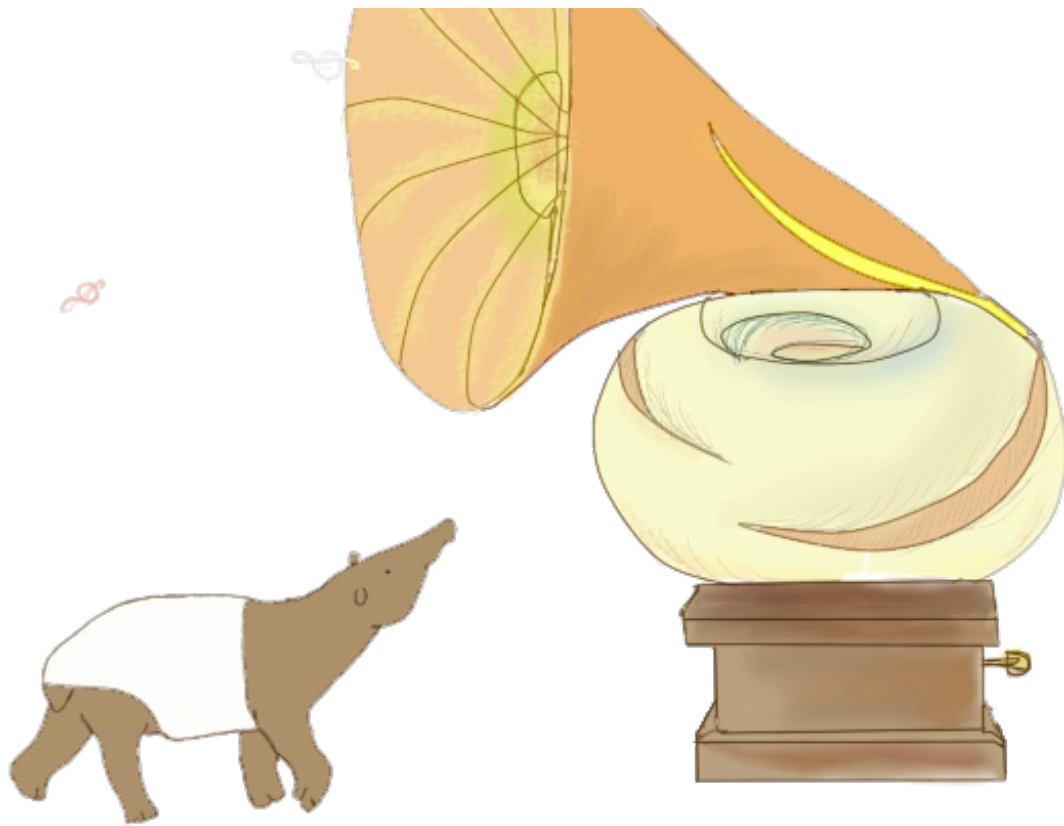
たからもののかくしばしょに この ほらあなは ぴったりです。

それとも、だれかが こっそり すんでいるのでしょうか。

いったい ほらあなの中には なにがあるのでしょうか？

ばくは 気になって 先に すすむことにしました。





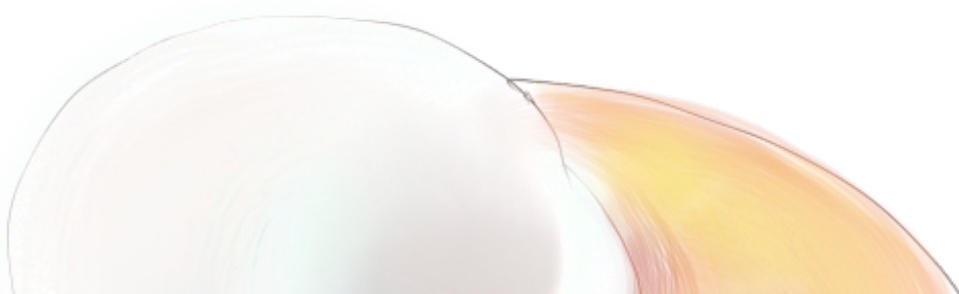
「だれかいませんかー？」

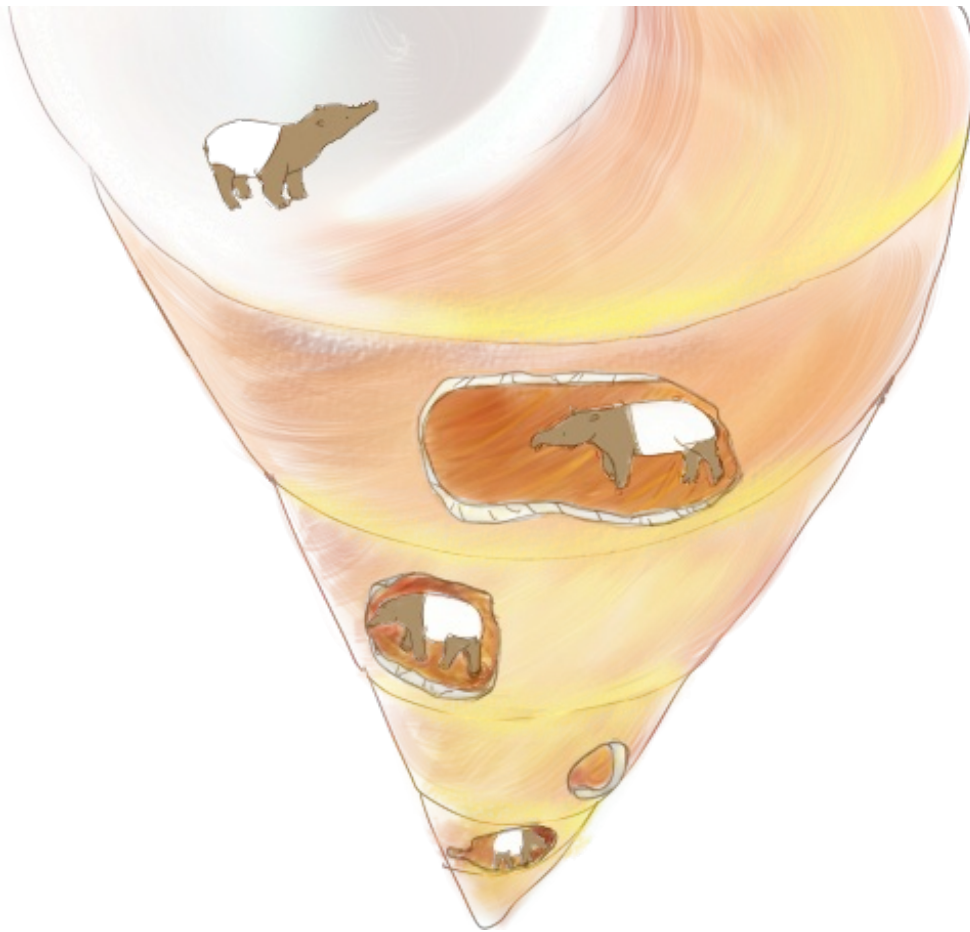
ばくは、かどを まがるたびによびかけてみましたが、へんじは ありませんでした。
ばくの こえ と あしおと だけが、まるいつうろに ひびいてから しずかに きえていきます。

ぽん、ぽおん、ぽおおん、ぽうわあああん。

ばくは、かえりたくなってきました。
ずいぶん歩いたので 足も いたくなってきました。
おなかも どんどん へってきました。

でも、まだ ほらあなは つづいています。
もうちょっとだけ、いってみよう。
ばくは なんとか ひきかえそうか と なやみましたが、けっきょく おくへ おくへと すすんでいきました。





なんかいも なんかいも かどをまがって、ばくは だんだん じぶんが どこにいるのか わからなくなりました。

ばくの あたまの はるか うえにあった てんじょうが、ついに ばくの耳が とどくくらい ひく くなってしまいました。

さいしょは やわらかく なつかしい きもちがした ほらあなでしたが、どんどん せまく くらくなっています。

ばくは 耳をこすらないように かがんで歩きつづけましたが、すぐに かたが かべにつっかえて しまいました。

もう にっちもさっちも うごけません。

「だれかー？」

ぽん、ぽおん、ぽうわああん。

ばくは、小さな声で呼んでみました。

もう これいじょう すすめないのに、だれも へんじを しません。

ばくのごはんになる わるい夢の においも しません。





ぼくは、なにをさがしてたんだっけ？
ぼくはふいにふしぎに思いました。

こんな、だれもない ほらあなの奥に なんてひとりで きたのでしょうか。

「ねえ」

ぼくは、みょうに せきたてられるような きもちになって、じぶんの せなかを ふりかえろうとしました。

でも ほらあなは あまりにもせまく、ぴったり はまりこんでしまった ぼくは かおを うごかす ことができません。

まいごで おなかもぺこぺこな ぼくは、さみしくて せつなくて、どうしたらいいのかわからなくなってしまうました。



おもわず うごけない ばくが なみだを ひとつぶ こぼすと、それも ちいさくて うつくしい おと になりました。

ぽおん。

その きれいな ひびきも すぐにからっぽの ほらあなの おくに きえてしまいました。
そして、ついに、ばくは、この殻の中に、だれもいないことを知ったのです。





ある夜の事です。

おなかをすかせてふらふらと歩いていたばくは、なにかかたいものにぶつかってしまいました。



なんと、道のまんなかにあったのはばくとおなじくらい大きな巻き貝です。

ばくは目をぱちくりしました。

こんな貝殻みたことはありません。

大きすぎてどけないと道をとることができません。

しょうがないのでばくはじゃまな巻き貝をうごかすことにしました。

貝殻はずっしりとおもく、ばくがいっしょうけんめいおしてもちっともうごきません。

しばらくすると、ばくはつかれてしまって、ふうふういいながらすこしおやすみすることにしました。



ばくは、ひんやりした貝殻にもたれると、この中にはいったいなにが入っているのだろうと
考えました。

もし中になにかいるなら、うごかそうとしている間に起きてきそうな気がします。

でもそのようすはありません。

きっとなにかくらくておもいもの、

たとえば、かなしみやふあんやまだ見ていないあくむみたいなもの

がつまっているのではないだろうか　と、ばくは殻をのぞいてみましたが、

ふしぎなことに中はからっぽのように見えました。



だったら、これは、ほら貝でしょうか。

この大きな巻貝に、息を吹き込んだら、どんな音がするのでしょうか。

ふうふう。



ばくは、道ばたにさいているきれいな花を見ながらためしに吹いてみました。

ぷうぷうー。



お昼に たべた おいしい くだものをおもいだして もっと 吹いてみました。

ぷーほーぼー。



あの星の なまえは なんだろうなあ と 空を見上げながら 吹いてみました。

ざんねんながら、巻き貝から 出てくる音が ぜんぶ きれい というわけでは ありませんでした。
でも、ばくは たのしくなって、よかったこと すてきだったこと
いろいろ話をするように おもしろい音をつぎつぎと 出してみました。
そのうち、巻き貝が だんだん あたたかく なってきました。





ばくは そのまま まるで たまごを あたためるように 巻き貝を かかえました。
貝殻がとても気に入ったので、ずっと いっしょにもっていきたくになりました。

こんなに 大きなものをはこぶとしたら、のんびり ゆっくり 歩かないといけませんが、それも いいんじゃないかと おもいました。

さっきまでは、おもくて うごかせなかったけれど もうちょっと吹いていれば、せなかに せおえるくらい かるくなるかもしれません。

いえ、ほんとうに かるくなってきています。

これから さみしいときや かんどうしたとき、いつでも 貝殻を 鳴らせるのです。



ばくは まんぞくして あくびをしました。

うでの中にある、すべすべした あたたかいものが ねむけを さそいます。

いったい これは、なんだったっけ？



たいせつなものだったような気がしましたが、ばくはおもいだせませんでした。
そうして、そのままねむりに おちてしまいました。



ちいさいばくとちいさいかたつむり

ある夜の事です。

ばくは、とつぜん、じぶんがちいさくなっていることに気づきました。



どんなにちいさいかというと、ばくがくびをうんとのばしても、キャベツのてっぺんがみえません。

それどころか、ばくが10ぴきいたとしても、キャベツの葉っぱいちまいの下でぜんいんあまやどりできてしまいます。

ばくはこまってしまいました。

このままだととりやけものにたべられてしまいます。

ばくはキャベツの葉っぱの下でしばらくふるえていました。

でも、むこうの方からおいしそうなおいがただよってくると、ばくのおなかは、いつものように、ぐうとなりました。

そこで、ばくは、ながれてくるあくむをたべながら、だれがわるい夢をみているのかさがしました。





ぐるりとキャベツのまわりをあるいていくと、ばくとおなじくらいおおきな貝殻からあくむがもくもくでてきていました。

ばくは、いっしょうけんめいあくむをたべましたが、すぐにおなかいっぱいになってしまいました。

それでも、あくむはとまりません。

ばくはとほうにくれました。

こんなにちいさくなってしまっては、あくむもほんのちょっとならたべられません。

ばくはどうすればよいのかわからなくなったので、貝殻にどすんとたいあたりをしました。

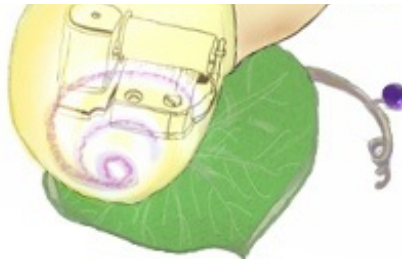
しばらくすると、貝殻からかなしそうな目がかたほうだけのぞきました。

それから、もうかたほう。

そして、ついにぜんぶのからだか殻からのろのろとでてきました。

ばくは、めのまえにいるいきものがじぶんととてもちがうことにびっくりしました。





ばくの目は のびたり ちぢんだり しませんし、からだも しめっていません。
ばくのあしは よんほんですし、せなかに 殻を せおっても いません。



「ばくさん、ずっと さがしていました」
いつも ちいさな声だと思っていたけれど、おなじおおきさになると よく聞こえました。
ばくは、なにか言おうとしました。
でも、あいての なまえを わすれてしまっていたのです。

「ばく……ばく ぜんぜん だいじょうぶじゃない」
ばくが 泣きそうになると、あいては あわてて 目を うろうろ させました。

「どうしたんですか、たいへん、どこか いたいんですか。 けが したんですか」

「ううん、そうじゃないんだ。

ごめん、ぼく きみが だれか おもいだせない」

「いいんですよ、ばくさん。なんかいわすれても、なんかいでもおもいだせます」



うつくしいみどりのやねの下、2ひきはむきあいました。

「わたしは、かたつむり。そして、ばくさん、あなたはわたしの だいじな おともだちです」

「かたつむり、どうしよう。

ぼく こんなに ちいさくなっちゃったんじゃ、これから きみの わるい夢を ぜんぶ たべてあげられないよ」

「なんだ、そんなことですか」

「でも、ぼくが たべてあげなきゃ、きみは ずっと 怖い夢を みちゃうよ」

「そうですね、ばくさん。 あなたに たべてもらっても、たべてもらっても わたしは つぎつぎに あくむを みてしまいます。

こわいものも おおすぎて、だれに せつめいしても わかってもらえとは思いません。

でも ばくさん、わたしは いまは めざめるのが こわくなくなったんです。

おきたら、あなたが あたたかな おひさまと まっていて、いっしょに たびに でかけられると しているから。

だから、わたしはもう少しでもましなおわりをさがして、夢から夢をみつづけなくてもいいんです」



「わたしが、あなたをさがしていたのは、あなたがわたしのわるい夢をたべてくれるからじゃないんです。

わたしのあくむをたべられなくても、わたしよりちいさくなってしまっても、

ばくさん、あなたはわたしのだいじなおともだちです」

「ほんとうのほんとうのほんとうに？」

ばくは、びっくりしました。

かたつむりがうなされてしくしくなきながらねているときに、わるい夢をたべてあげられないじぶんなんていやでたまらなかったからです。

かたつむりはばくにやさしい声でこたえました。

「ほんとうのほんとうのほんとうに」



「わたしがこわがりなせいであなたにさみしくて、いやなおもいをさせてしまいましたね」
「でも、ばくさん、あなたはもう目をさましてもいいんですよ」

そのときやっと、ばくは、ずっと夢をみていたのだと気づきました。

そして、もう夢をみつづけるひつようがないことも。

流れ星のせいでみたばくがちいさくなったり、かたつむりがおおきくなったりするへんてこな夢。

かたほうがおおきくても、かたほうがちいさくても、ばくとかたつむりはともだちでした。

だから、これはわるい夢ではないのです。





これは、そんな夢のはなしです。



ばくとかたつむりのまいごの夜

<http://p.booklog.jp/book/81907>

え：きむろみ

<http://ameblo.jp/kim-romi/>

ぶん：立田

【ばくとかたつむりのまいごの夜】は、【ばくとかたつむり】のスピノフとなります。
こちらを読んでいただくと、わかりやすいかと思います。

【ばくとかたつむり】について

あらすじ：『こんばんは、かたつむり。どうしてそんなにわるい夢ばかりみているの？』 ある夜 ばくはキャベツの葉っぱのかげで泣きながらねむっているかたつむりを見つけます。かたつむりのわるい夢をたべすぎておなかいっぱいになってしまったばくは……。――かなしがりのかたつむりとばくのはなし。

ブクログのパプー（ダウンロード可）：

シンプル版：<http://p.booklog.jp/book/47197>

フルサイズ版：<http://p.booklog.jp/book/47198>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81907>

ブクログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81907>

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパプー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブクログ